

令和3年度事業報告

自 令和3年 4月 1日
至 令和4年 3月31日

令和3年度(2021年度)の事業計画【計画】

第 37 回理事会(令和 3 年 3 月 12 日開催)の第1号議案「令和 3 年度事業計画」でご承認いただきました事業計画は以下の通りです。

1. 基本方針

<1>財団設立主旨と中期事業計画に則った事業(調査・研究)推進

未来に向けて志向していくべき新しい生活の方向性を“ハイライフ”と定義し、調査・研究を実施し、その成果を啓発・普及していく研究財団として、

(財団理念) 「都市生活者のよりよい生活の実現への貢献」

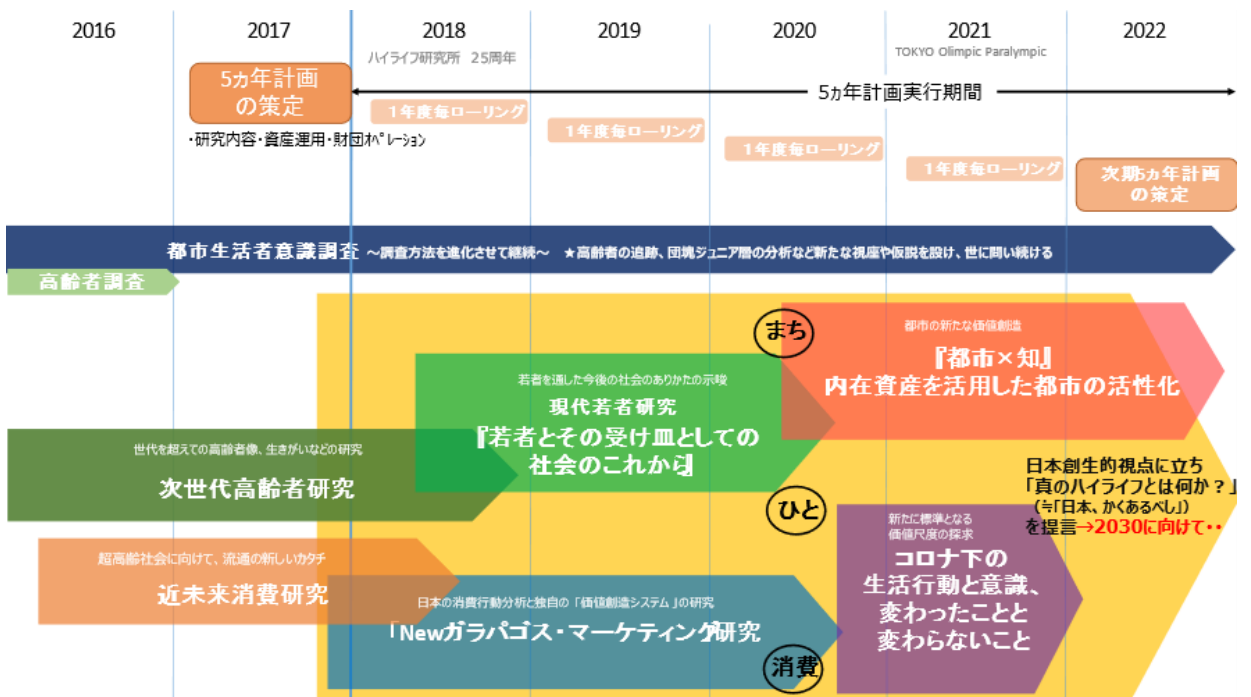
を財団理念に据え(公1)調査・研究事業と(公2)啓発・活動事業に区分して、それぞれの内容のさらなる充実化・高度化を目指して再スタートを切り、現在に至ります。以降、

(事業目的) 「持続可能な都市居住の実現に向けた知見の獲得と、社会との共有」

を事業目的とし『まち』『ひと』『消費』の3カテゴリでの調査・研究を行ってきました。

平成 30 年度(2018 年度)には設立 25 周年を迎え、このタイミングで四半世紀を振り返り、また時代や環境の変化を再認識し、設立 30 周年(令和 5・2023 年度)に向けてのターニングポイントと位置づけ中期事業計画(5ヶ年計画)を策定致しました。

令和 3 年度(2021 年度)は計画の終盤戦に差し掛かりますが、本中期事業計画に則り、調査・研究を遂行してまいります。



<2>公益法人の研究所の使命として、新型コロナウイルスが生活者に対して 及ぼした影響を正しく分析し、将来への変化の予兆を発信する

「都市生活者のよりよい生活の実現への貢献」を財団理念に据え、「持続可能な都市居住の実現に向けた知見の獲得と、社会との共有」を事業目標に調査・研究を行っている当財団の使命としては、新型コロナウイルスが人々の暮らしや考え方にどのような影響を与え、どのように変化したのかを解明することが求められます。また、この先将来に向かって、どのような生活価値観やライフスタイルが定着していくのかを予測することが公益法人の研究所としての責務であると考えております。

この先、『社会はどのように移り変わっていくのか』を予兆し提唱していくことこそが、「持続可能な都市居住の実現に向けた知見の獲得と、社会との共有」を事業目的に据えている当財団の使命であると考えております。コマーシャルベースではなく、正しく冷静に、社会や人々の暮らしの変化を見極め、世に対し啓発していくことが、公益法人の責務であると考えております。

<3>近年実施したの(公益事業1)及び(公益事業2)各々の調査結果を 二次活用として、今一度、体系的に相関関係と経年変化を分析する

新型コロナウイルスの国内での感染が発見されて1年が経ちますが、その後、人々の暮らしや経済環境は大きく変わりました。この先、コロナ禍が収束する時期がいつになるかは不明ですが、コロナ禍以前と現在の比較分析を総合的に行います。

そのためには、毎年実施している「都市生活者意識調査」の結果データの時系列分析と、「次世代高齢者研究」「現代若者研究」「近未来消費研究」「高齢者パネル『食の購買追跡調査』レポート」で実施した調査のデータの再分析を行い、総合的に『生活意識』『生活者価値観』『生活行動』『消費行動』の変化と関連性を紐解きます。

このことは、『まち』『ひと』『消費』というカテゴリーにおいて5年間に亘り行ってきた研究のデータストックの有効活用と、コストパフォーマンスにも繋がります。

2. 令和3年度(2021年度)の事業体系

<公益事業1> 調査・研究事業

- 調査:都市生活者意識調査 2021
- 研究1:まちの研究
「【都市×知】内在資産を活用した都市の活性化」(PHASE2) (継続)
- 研究2:ひとの研究
コロナ下の生活行動と意識、変わったことと変わらないこと (新規)

<公益事業2> 啓発・活動事業

- ホームページ企画 A 高齢者パネル「食の購買追跡調査」レポート
- ホームページ企画 B 都市の魅力レポート「都市の鍼治療」データベース
- ホームページ企画 C 「暮らしの調べが聴こえる」Season2
- ホームページ企画 D 「現代若者研究」メルマガ版
- ホームページ企画 E 「海外都市レポート」 (期中追加)
- セミナーA 第36回ハイライフセミナー
まちの研究(研究1:【都市×知】)に関する研究成果の中間報告
- セミナーB 第37回ハイライフセミナー
ひとの研究(研究2:コロナ下の生活行動と意識、
変わったことと変わらないこと)から導かれた結論の提唱
- 報告書の配布 調査・研究の報告書、セミナー録

令和3年度(2021年度)事業展開／公益事業1:調査・研究【結果】

(調査) 都市生活者意識調査 2021

令和3年度(2021年度)は、以下の要領で第12回目(年目)として実施しました。

- **調査目的** 都市生活者のニーズと現状、そして将来動向を把握するための基礎研究
白書的な役割に加えて、研究テーマに資する役割も果たせる。
時系列分析を行うための基本質問に加え、新型コロナウイルス感染拡大に伴う意識や行動の変化に関する質問もトピックスとして盛り込む。

- **調査対象** 東京 30km 圏内に在住の満 18 歳～79 歳一般男女

- **標本抽出** (株)インテージのマイティモニターから、性別年齢、居住エリア分散、単身比率、集合住宅比率が公的データの比率と乖離が無いようにスクリーニング。

1,568 人

※人口構成比率に準拠

	計	満18 ～19歳	20代	30代	40代	50代	60代	70代
全体	1568	49	233	267	321	285	206	207
男性	782	26	116	134	162	145	103	96
女性	786	23	117	133	159	140	103	111

- **調査方法** インターネット調査(調査画面を3本作成し、1本目回答者に2本目配信、
2本目回答者に3本目配信の形で回収)

- **調査時期** 令和3年10月21日(木)～11月10日(水)

- **研究協力** (調査実施担当) 株式会社インテージ
(調査研究担当) 自由学園最高学部(大学)教授 水嶋 敦氏

- **公表** 「分析編 500 冊・「データ編」500 冊 → 全国主要大学の図書館、
全国公立図書館へ無償で配布。
ならびに、当財団ホームページに PDF 掲出。

- **研究幹事** 公益財団法人ハイライフ研究所 上席研究員 杉本 浩二

(研究1) まちの研究

「【都市×知】 内在資産を活用した都市の活性化」 (PHASE2)

■研究目的

市民活動、市民参加など、市民の知恵を活かした活動を、大学の知、企業の知、医療の知、金融の知など「様々な知」が支援・連携しながら、「夢を追いかける人々をひきつけている」都市を調査・研究する。知のネットワークモデルを探り、都市のエコシステムに迫る。

■令和3年度の実施内容

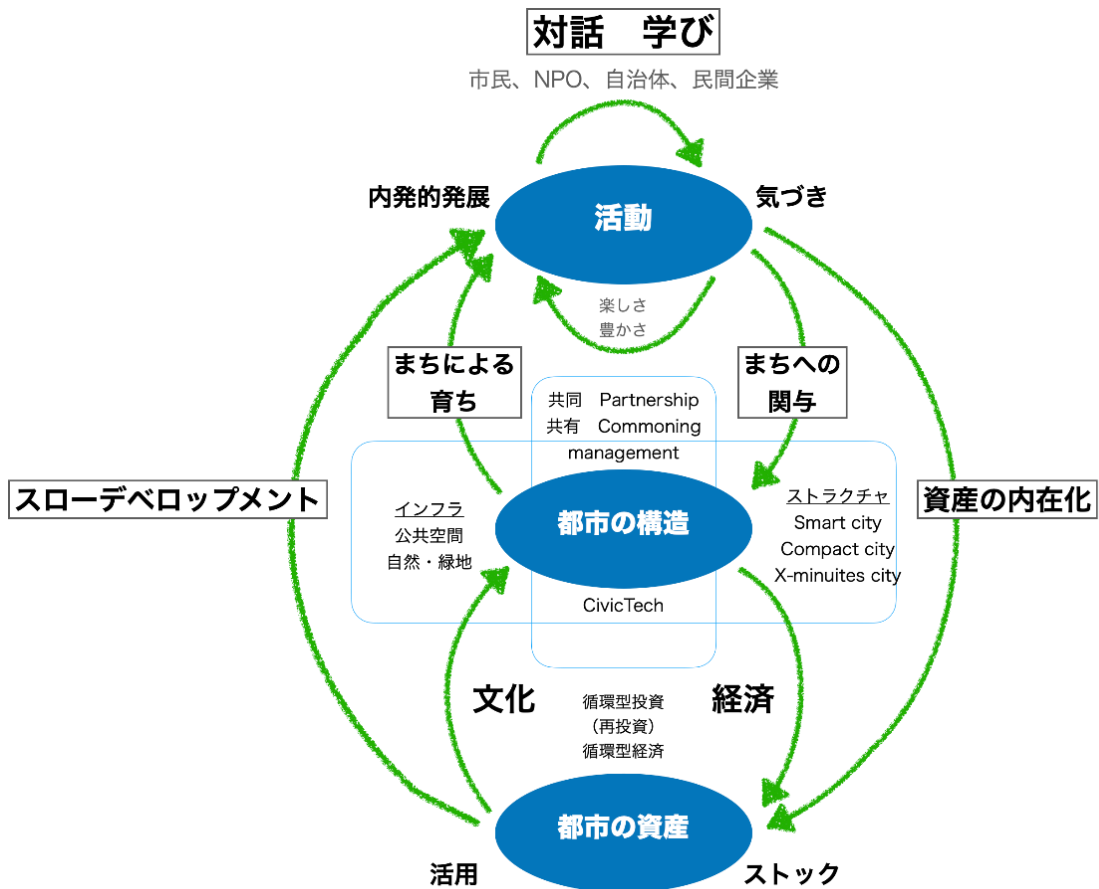
●有識者インタビュー(総11名)調査&総括

インタビューをもとに都市が内発的かつ自律的に持続していくための仮説として下記の構造図を作成中である。これは有識者インタビューと共に、報告書としてまとめ、ハイレブのホームページ上で閲覧及びダウンロードできるようにしていく予定(令和4年6月頃)。

都市の自律的再生産

アーバン・オートポイエーシス(仮) Urban Autopoiesis

*オートポイエーシス(autopoiesis)は、チリの生理学者ウンベルト・マトゥラーナとフランシスコ・バレラによって提唱された、生命システムを特徴づける概念。自己生産を意味し、システムの構成要素を再生産するメカニズムを指す



●若者の都市に対する意識調査・総括

- ・「夢を持った若者を引き付ける都市の要素とは？」
大学を卒業し、数年会社等で働きながら、それでもなお夢を追いかけている人々（20～30代。転職適齢期でアフターユニバーシティの層）が選択する都市の条件を導き出す。
- ・手法:インターネットアンケート調査
- ・実施時期:令和3年12月
- ・対象:20～30代、社会人、全国
- ・総数:2,000サンプル
都市が内発的かつ自律的な発展をとげるために必要と考えられる若い人材をクラスター分析によって導き出した。その人材を「社会派イノベーター・クラス」と名付け、彼ら彼女らが求める都市の要素を抽出した。この結果をもとにハイライフセミナーをオンライン配信形式で実施した。定量調査結果の報告と「社会派イノベーター・クラス」と目される20代、30代の若者を招いた座談会の2部構成で行った。

●第36回ハイライフセミナー(Web開催)

- 「都市×知」～社会派イノベーター・クラスの若者が都市に求めるもの～
- ・開催日時:令和4年5月27日より配信開始

■令和4年度 実施予定

- ～(PHASE3)として「市民都市」調査
市民活動が中心にあり、それを外部(大学、民間、公的組織)が潤滑油のように支え支援する仕組みが機能している都市(市民都市)を抽出し、その各関係者にヒアリングを行い、その機能を明らかにする。
- ・候補都市「ボローニャ(イタリア)」「エスポー市(フィンランド)」「バルセロナ(スペイン)」「マルメ(スウェーデン)」「アムステルダム(オランダ)」「コペンハーゲン(デンマーク)」などから1～2都市を決める。コロナ禍の状況も考慮し、日本への変更も視野に入れる。
- ・各専門家へのヒアリング(大学、民間、公的組織など)
ボローニャ大学(ボローニャ)、アールト大学(エスポー市)、マルメ大学(マルメ市)等の各都市に存在する大学の超学際的な研究室教授、各都市の地元企業(新興イノベーション企業、地元デベロッパーなど)、各市役所職員など。
- ・市民活動の責任者へのヒアリング
上記外部組織と連携する地元NPOなどの非営利組織。このような非営利組織には市、地元企業、地元大学、有識者などがメンバーになっているケースが多くみられる。
- ・活動拠点視察
例えばマルメのメディア・エボリューション・シティのように、港湾の使われなくなった建物をリノベーションし、活動拠点として利用。関係者によるワークショップなどが盛んにおこなわれている。
- ・研究(PHASE 1～3)総括～令和4年度中にセミナー実施予定

■研究幹事

公益財団法人ハイライフ研究所 代表理事副理事長 榎本 元

(研究2) ひとの研究

「コロナ下の生活行動と意識、変わったことと変わらないこと」

■研究概要

本研究は、コロナ禍の収束を念頭に「ポスト・コロナの生活行動と意識、変わったことと変わらないこと～新たに芽生えた意識と定着する生活潮流～」というタイトルにて令和3年3月の理事会にて承認されたものである。言うまでもなく、コロナ禍は継続しており、その為コロナ禍が与えた生活行動と意識についての研究として、主にコロナ禍以前の令和元年とコロナ禍初年度としての令和2年、そして2年目と言える令和3年における意識変化を中心に研究が進められた。

また、コロナ禍の影響について、中間報告(令和3年11月実施)でも述べたように、団塊世代、団塊ジュニア世代、Z世代という3つの世代間での違いについて注目した。世代特性は勿論であるが、年代に置かれている環境、具体的には勤労状況、家族構成が異なり、当然コロナ禍というパンデミックが与える影響も異なるという前提に立脚している。

活用した調査データは、都市生活者意識調査2019・2020・2021の3年間分(令和元年～3年)であり、以下が3つの世代の調査対象者人数である。

尚、調査実施時期は毎年10月～11月上旬であり、コロナ禍前の令和元年は新型コロナウイルス新規陽性者数(1日平均)はゼロ(公表データ無し)、令和2年は185名(調査期間中の1日平均)、令和3年は22名であった。2021年の調査実施時期はオリンピック・パラリンピック後に急速に感染者数が減少し、このまま収束するかもしれないといった感覚も生じたことは事実である。

【3つの世代の3年間の調査数】

※都市生活者意識調査2019(令和元年)～2021(令和3年)から抽出

年次別調査数		調査数
Z世代	2021 (18～28歳)	248
	2020 (18～27歳)	204
	2019 (18～26歳)	153
団塊ジュニア世代	2021 (47～50歳)	161
	2020 (46～49歳)	158
	2019 (45～48歳)	117
団塊世代	2021 (72～74歳)	81
	2020 (71～73歳)	87
	2019 (70～72歳)	100

■分析項目

1. 生活全般に対する意識
 - ・幸福感、生活満足度、現在の生活水準
 - ・生活水準の1年前との比較、2～3年後の生活展望
 - ・衣食住など11領域についての興味と満足

2. 衣食住の意識に関する変化
 - ・衣食住の各々の領域に関する意識の変化
 - ・衣服にかける費用
 - ・自宅での料理の頻度、夕食用の総菜・弁当の利用頻度
3. 人間関係と仕事とメディアに関する意識
 - ・健康状態、ストレス、健康などに関する意識
 - ・家族や友人との関係、友人の数や参加活動の変化
 - ・仕事時間の増減と仕事に対する意識
 - ・使い慣れているメディアと信用できるメディアの変化
4. 消費行動
 - ・収入の増減と生活費の項目別増減や希望
 - ・店舗選択、重視する商品価値
 - ・購買行動におけるデジタル受容性とディスカウント利用
5. コロナ禍と社会
 - ・社会満足度と現在と将来における生活や社会への不安
 - ・なっしてほしい社会、社会問題に関する意識、自己の生き方や暮らし方についての考え
 - ・コロナ禍後の行動、新たに取り組んだこと、気持ちや考え方の変化
 - ・制約された暮らしの中での新たな発見・気づき
 - ・コロナ収束後に起こると思う生活周りの事象

■結果の要約

全体を通じて、団塊世代はストレスが低く、コロナ禍への対応力が高いと考えられる。例えば趣味活動や友人との付き合いといった良い意味での“逃げ場”を探すのが早い。団塊ジュニア世代は、子供がいる世帯が比較的多く、コロナ禍によって在宅率が高まる中で、家族との時間も増え、生活における負担感といったものが感じられた。ゆとりのない中で、趣味やファッションなどに関して興味や満足が低下している。極論すれば、自由人的な団塊世代と背負うものが少ない Z 世代の谷間で、最も負荷の大きい生活スタイルの中で必死に生きているという感すらある。一方、Z 世代であるが、背負うものが少ないとは言え、夢のある将来も描けていない。特にコロナ禍の 2 年目で失速するような項目も多くみられた。期待する社会像に関して、実現する可能性が低いと感じると、なっほしいと思わなくなる、つまり諦める傾向がみられた。例えば、ダイバーシティや女性の社会進出といったことに対しても積極的な意思表示はみられない。2~3 年後の社会(つまりコロナ禍収束後)はよくなると考えているが、それは単なる希望であって、計画的なものも積極的な開拓意志的なものも調査結果からは感じられない。

団塊世代は過去の良い時代への回帰をベースに思考しているのであって、新たな生活スタイルの模索とは考えづらい。レジリエンス(復元力)的なものかもしれない。団塊ジュニア世代については環境面の改善(政治的な取り組みに近い)によって救われるべきと考えられる。マイナス面(例えば就職氷河期など)が多い条件下で団塊世代をトレースする感じの団塊ジュニア世代に、新たな生活スタイルを創造せよというのは酷であるように感じられる。Z 世代こそ、新たな価値、新たなスタイルを模索して構築できる世代であると思われる。彼らは将来の生活スタイルを過去の経験に求めることはできない。それがむしろこれからの時代、コロナ禍が収束した後の時代に求められる生き方なのではないかと考えられる。

■注目すべきポイント(本研究の締め括りとして以下の4つを挙げた)

生活潮流、生活意識・行動 4つのポイント

1.問われる生活デザイン～注目すべきZ世代のコロナ禍収束後～

Z世代は社会人になって10年に満たない人が大半であり、独身者が約9割である。やり直しがきく世代であり、積極的な挑戦が許される年代とも言える。しかし、コロナ禍以降、逆方向に向かっている。家族形成、計画的な将来設計、達成感、やりがい、活動的・行動的であること、これらは全て令和元年のコロナ禍前の水準を10ポイント程度下回っている。また、社会問題「女性の社会進出」「多様性尊重」に対する関心が低下しており、団塊世代とは逆である。Z世代は重要な生活デザインを模索する機会をコロナ禍によって阻害されたのかもしれない。

2.会社コミュニティのその先～鍵を握るハイブリッド型勤務～

会社を軸としたコミュニティは、在宅勤務やリモートワークによって後退していることは間違いない。それとともにコミュニティの今後という視点で注目すべきポイントとして「人づきあい」についての行動・意識がある。つきあう友人の数がコロナ禍において減っているのは仕方がないとして、団塊ジュニア世代では「人づきあいは面倒くさいと思う」人が令和元年の24.8%からコロナ禍以降は40%を超えている。Z世代は変わらず30%弱、団塊世代は20%強から令和3年には6.2%に減少している。若い世代の交友関係、人数の低下や意識が、婚姻や出産に直結するというのは短絡的だと思うが、コロナ禍の影響が続いた場合、更なる人づきあいを面倒と思う割合が増えるとなると、その延長線上に家庭を持つといったことへの影響がないとも言えない。会社コミュニティが良いとは言えないが、人との接触を増やす機会としては無視できないのではないだろうか。在宅勤務とオフィス勤務のハイブリッド型による変化がコロナ禍収束後、最も注目すべきポイントになりそうだ。

3.進む購買行動のデジタルシフト～コロナ自粛の限界が近づく？～

購買行動の変化について目を向けたい。コロナ禍においては収入が1年前より減少傾向にあるため、1円でも安い店を選択したり、無名メーカーの安い商品を選択したり、特売日やタイムセール利用が伸びたりするかと言えば、むしろ逆の傾向が3つの世代ともに示された。その一方で、店舗選択や商品選択における安さの追究に代わって、スマホ決済の利用に伴う、クーポンアプリの利用が伸びている。言わば、購買行動のデジタルシフトが進んだと言える。店舗に行かないと分からない安売りの情報を軸に購買が為されるのではなく、手元にあるスマホで選択できるお得な購買へと変化する動きがみられた。

令和3年はコロナ禍の2年目、自粛の2年目となり、生活費支出においては趣味・娯楽費を積極的に増やしたいという変化が3つの世代に共通してみられる。Z世代においては交際費にもその傾向がみられる。自粛への反動意識の兆し、自粛意識の限界の中でバランスを考えた消費支出の模索と解釈できるのではないだろうか。

4.便利なデジタル(機器やサービス)の陥穽

コロナ禍以降の1つの流行的現象に「オンライン飲み会」がある。コロナ禍初年度ともいえる令和2年は、Z世代の16.7%、団塊ジュニア世代の8.9%、団塊世代において

も5.7%が経験している。ところが令和3年には約5%程度、減少しており、拡張する傾向はみられない。オンライン会議においては団塊ジュニア世代、Z世代で15～20%強の間で実施されており、減少幅は少ない。飲み会と会議という性質の違いが当然あるようだ。これらの減少傾向を裏付けるように、「オンラインでのコミュニケーションは難しい、物足りないと感じた」という比率が、Z世代で17.2%(令和2年)から21.4%(令和3年)に増加している。意思の疎通の難しさや楽しめないといった気持ちを感じられる。デジタルネイティブであるZ世代においては、「ネットやソーシャルメディア上の人づきあいは面倒だと思う」という数値がコロナ禍以降、増加傾向が続いている。Z世代は約30%程度がコロナ禍前後において、「人づきあいは面倒くさい」と答えている。

メディアに関して、信用できるものを問うた結果、Z世代は「ひとつもない」という回答が25.5%(令和元年)から34.3%(令和3年)に増加した。例えば、「テレビのニュース番組」は同じ期間に45.1%から33.1%に減少、「新聞の記事」も19.0%から9.7%に減少、「ネットのニュース記事」も15.7%から3.6%に減少し、「家族や友人・知人の話」も24.8%から22.6%に減少している。参考までに「テレビのニュース番組」を信用できるとする数値は団塊ジュニア世代49.7%(令和3年)、団塊世代74.1%(令和3年)である。Z世代が新聞やテレビ離れは指摘されていたことであるが、ネットのニュース記事においても信用できると考える人は3.6%しかおらず、最大多数は「ひとつもない」という意見である。

■別視点からのアプローチ(慶應義塾大学 商学部 清水聡教授による分析)

コロナ下における生活意識・行動に都市生活者意識調査をベースに3つの世代にフォーカスをしてまとめた。それとは別の視点で、慶應義塾大学商学部清水聡教授に原稿を依頼した。

清水教授は、「1年前と比較した生活水準」に着目された。つまり、1年前と生活水準が良くなった、変わらない、悪くなったという3つのグループに分けて様々な項目とクロスさせて分析されている。令和2年の調査結果は1年前がコロナ以前であり、コロナによる生活水準の変化と他の項目との関係を見て取れる。令和3年の調査結果は、コロナ禍1年目と2年目の違いに注目することができる。家計支出や生活意識などに関して、生活水準によって違いがあるかどうかなどの結果を整理されている。また、清水教授は原稿のまとめにおいて、「将来のことよりも今のことを考える、近視眼的な傾向」の高まりを指摘されている。

■第37回ハイライフセミナー(Web開催)

コロナ下の生活行動と意識 変わったことと変わらないこと
・開催日時:令和4年6月下旬配信開始予定

■研究幹事

公益財団法人ハイライフ研究所 専務理事業務執行理事 藤原 豊

令和3年度(2021年度)事業展開／公益事業2:啓発・活動【結果】

1. ホームページ&メールマガジンによる情報配信

(ホームページ企画 A)

高齢者パネル「食の購買追跡調査」レポート 「高齢者の食品購買行動 2021」

■企画意図 令和元年度から食品全カテゴリーでの購買行動分析によって、高齢者の「食生活」と「生活行動」を推測し、そのエッセンスを WEB コラムコンテンツとして周知してきた。特に、令和2年度からはコロナ禍における高齢者の購買行動の変化についての考察が加わった。超高齢社会の更なる進捗を踏まえ、継続して変化を捉えていく重要性はますます高まるものと思われる。よって、来年度も継続し、『高齢者の食生活動向』の定点観測・分析を行い、特徴が顕著に現れている内容を抽出しレポートしていく。

■配信コンテンツ

R.3/5/28	第1回 「高齢者の食品スーパーの利用動向」
R.3/6/24	第2回 「コロナ禍経過1年後における高齢者の購買動向」
R.3/8/6	第3回 「高齢者の減塩調味料購買行動」
R.3/9/30	第4回 「オリンピック期間中における高齢者の食品スーパー利用動向」
R.3/10/28	第5回 「シニアの即席食品・惣菜購買行動」
R.3/11/26	第6回 「2021年ヒット商品とシニア層の購買行動」
—	
R.4/1/14	第7回 購買データ分析特別レポート 「コロナ禍を挟んだアルコール飲料への購買動向」
R.4/2/25	第8回 購買データ分析特別レポート 「コロナ禍を挟んだアルコール飲料への購買動向2」

■分析データ

rsSM(real shopper SM)のID付購買履歴データ、400万ID／全国から、シニア世代60代から80代と、現役世代40代～50代を抽出し、比較分析しました。

■研究委託 株式会社アルブレイン

(ホームページ企画 B)

都市の魅力レポート
「都市の鍼治療」データベース

■企画主旨

国際建築家連合会会長、ブラジルの都市クリチバ市長、さらにパラナ州の知事を務めたジャイメ・レルネル氏は、都市が抱える問題を手っ取り早く解決する方法論として「都市の鍼治療(Urban Acupuncture)」を提唱しています。多くの課題に直面する都市はさながら病人のよう。「都市の鍼治療」とは、その都市の病を根治することは難しいが、効率的に鍼治療のように治すことが可能であるという考え方に基づく方法論。

本データベースは、「都市の鍼治療」という考に則り、ジャイメ・レルネル氏の「都市の鍼治療」で紹介された事例を含め、国内外の成功事例を紹介するもの。また費用対効果が大きかった事例に関しても併せて紹介し。手術ではなく鍼治療のように、都市が抱える問題を治す知恵のデータベース。当企画は平成 25 年夏に立ち上がり、令和 3 年度で 9 年度目。国内外のレポートと写真はアーカイブ化され、250 を超えるデータベースとなった。

データベースというコンテンツは、データが増えれば増えるほどデータ内のリレーションが密になり、その価値は高まっていく。また、当財団のホームページのコンテンツの中でもアクセス数の多さもかなりの上位に位置している。

ひと・まち・消費という3つの研究カテゴリーにおいて、(公益事業1)調査・研究事業とは別の形で継続的に国内外のまちをリサーチしアーカイブとして紹介しております。

■配信コンテンツ

- | | |
|----------|--------------------------------|
| R.3/5/20 | 231 長崎稲佐山スロープカー(日本) |
| | 232 ミュンスターの自転車プロムナード(ドイツ連邦共和国) |
| | 233 グラン・プラス(ベルギー) |
| | 234 鈴鹿・長宿の景観整備と保全(日本) |
| | 235 用賀プロムナード(日本) |
| R.3/7/16 | 236 タグボート大正(日本) |
| | 237 長崎水辺の森公園(日本) |
| | 238 タングア公園(ブラジル連邦共和国) |
| | 239 由布院駅周辺の交通体系再編成(日本) |
| | 240 由布院駅(日本) |

- R.3/9/16 241 シティズンシップ・ストリート(ブラジル連邦共和国)
 242 ノイハウザー・ストラッセとカウフィンガー・ストラッセ(ドイツ連邦共和国)
 243 コウノトリと共生するまちづくり(日本)
 244 汽車道(きしゃみち)(日本)
 245 大分いこいの道(日本)
- R.3/11/26 246 那須街道の赤松林(日本)
 247 グアナファトのミギユエル・イダルゴ通りの地下化(メキシコ合衆国)
 248 クリチバ市のユーカリ電信柱のリサイクル(ブラジル連邦共和国)
 249 伊根浦の舟屋群の伝建地区指定(日本)
 250 ノイハウ(Nyhavn)の歩行者道路化(デンマーク王国)
- R.4/1/14 251 杭瀬中市場の再生(日本)
 252 マーガレーテンヘーエのアイデンティティ維持(ドイツ連邦共和国)
 253 ロープウェイ通りの空間再構築(日本)
 254 グエル公園(スペイン)
 255 リノベーション・ミュージアム冷泉荘(日本)
- R.4/3/11 256 金澤町家の保存と活用(NPO 法人金澤町家研究会)(日本)
 257 三津浜まちづくり(日本)
 258 さんきたアモーレ広場・サンキタ通りの再整備(日本)
 259 ゴスラーの市場広場(Marktplatz des Goslar)(ドイツ連邦共和国)
 260 大内宿の景観保全(日本)
-
- R.3/7/16 柴田久(福岡大学工学部社会デザイン工学科教授)インタビュー(動画)
 R.3/7/21 ジャイメ・レルネル氏追悼オンラインセミナー(動画)
 R.3/9/16 高尾忠志(地域計画家)インタビュー(動画)

■研究委託

龍谷大学 政策学部教授 服部圭郎 氏

暮らしの調べが聴こえる Season2

今を生きるひとの思いを量り、想いを巡らす令和の都市生活者コラム

■企画主旨 「都市生活者意識調査」結果のエッセンスを生活者向けのレポートとして配信しました。生活分野ごとの際立った特徴をトピックスとして紹介し、興味関心を持っていただいた方を「都市生活者意識調査・報告書」の閲覧に誘導し、ハイライフ研究所の活動を一般生活者にも認知して貰うための窓口としての役割を果たす。

新型コロナウイルス感染症の感染流行は私たちの日常を予期せぬ形で大きく変化させた。人々の意識と行動の変容、人々がこの環境にどう適合し日常を進化させたかは今後、様々な角度から検証、解明がなされることであろう。このコラムはハイライフ研究所「都市生活者意識調査」(令和 2 年実施)の結果を題材として借りながら、令和に生きる人の気持ちに耳を傾けます。そして気持ちの背景を探るため象徴的な事象や時層を採りあげるとともに、コロナ以降の視点を織り交ぜながら掘り下げて分析した。

■配信コンテンツ

R.3/5/28	第 1 回 「男女、意識差」の現在
R.3/6/24	第 2 回 「望む暮らし方」徹底比較
R.3/7/30	第 3 回 「ひとづきあい」の現在
R.3/8/26	第 4 回 「老後観」の年代比較
R.3/9/30	第 5 回 収入階層でみる意識の差
R.3/10/28	第 6 回 これからの社会に対する期待と不安
—	
R.4/3/31	第 7 回 都市生活者意識調査 2021 公開企画 「今の暮らしの統計集」

■分析データ 都市生活者意識調査 2020

■分析・執筆 公益財団法人ハイライフ研究所 主任研究員 福與宜治

「現代若者研究」メルマガ版

- 企画主旨
- 公益財団法人ハイライフ研究所では、令和元年度から「現代若者研究」を行ってきた。初年度は、少子高齢化社会での「若者の存在感」に疑問を感じ、大学生の、生活意識と行動の実態を探ることから始め、その結果、今の大学生は、物理的にも精神的にも、非常に狭いドメインの中で生きていることが明らかになった。換言すると『居心地のよい、小さな閉じた世界にいる、若者像』。
- また、令和2年度は、20代の社会人を対象として、就職というプロセスを経て、「生活意識や態度」はどのように変わるのかを探求した。この「小さな閉じた世界」に存在する若者たちが、どの様に社会や会社を受け入れていくのか？また、社会や会社は、彼等をどの様に受け入れていけば良いのか？
- そして令和3年度は、これまでの現代若者研究をおさらいしつつ、若者たちをとりまく社会や生活はどのような姿なのかを予測し、時代を牽引するであろう彼ら彼女らにスポットを当て研究の集大成とした。

■配信コンテンツ

- | | |
|-----------|---------------------------|
| R.3/7/30 | 第1回 大学生から社会人への意識変化 |
| R.3/8/26 | 第2回 20代社会人かく語り |
| R.3/9/30 | 第3回 典型的なタイプとは？〈男性編〉 |
| R.3/10/28 | 第4回 典型的なタイプとは？〈女性編〉 |
| R.3/11/26 | 第5回 時代を牽引する若者とは |
| R.3/12/24 | 第6回 時代を牽引する若者とは(その2) |
| R.4/1/28 | 第7回 時代を牽引する若者とは(その3) |
| R.4/2/28 | 第8回 若者について教育の専門家に聞く |
| R.4/4/22 | 第9回 (最終回)若者の“これから”について考える |

- 分析・執筆 公益財団法人ハイライフ研究所 研究員 谷口明美

(ホームページ企画 E) 期中追加

「海外都市レポート」

■企画主旨 (公 1)まちの研究「都市×知」を進める上で、参考となりそうな海外都市の研究が、コロナ禍で非常に難しくなっているため、令和3年度期中から海外の都市に焦点をあてた都市研究レポートを常時発信する。
有識者のネットワークを活用して、海外都市に居住する現地日本人専門家に、研究テーマや研究対象を投げかけ、関係者取材や写真撮影などを行ってもらい、当財団発の「海外都市レポート」¹として web コンテンツとしての展開を開始した。
「都市の鍼治療」とは別の切り口での海外の都市研究事例の蓄積にもつながっていく。

■配信コンテンツ

- R.3/11/5 How will we live together—我々はいかに共存していくのか
～2021 年、ヴェネチア・建築ビエンナーレから学ぶこと～
(執筆:山下めぐみ氏(ロンドン在住))
- R.3/12/24 都市の活性化における建築とアートの新しい役割
～南フランス<リュマ・アルル>の取り組み
(執筆:山下めぐみ氏(ロンドン在住))
- R.4/2/4 「地区の家」の登場
～イタリア現代都市における「みんなの場所」の復活～
(執筆:多木陽介氏(批評家/アーティスト、ローマ在住))
- R.4/2/25 人々の暮らしから見る、メルボルンの現在
～パンデミック下で実感した地元愛と、自然回帰への取り組み～
(執筆:山倉礼士氏(デザインジャーナリスト、メルボルン在住))

■企画協力 Future Research Institute 紫牟田伸子 氏

セミナー開催

(セミナーA)

第36回ハイライフセミナー 「都市×知」 ～社会派イノベーター・クラスの若者が都市に求めるもの～

■開催趣旨 今後数十年に渡って、高齢化が進行し人口が減少していく日本において、都市(特に地方都市)が自立的かつ持続的な発展を遂げていくためには、若者の力が欠かせないだろう。今回、ハイライフ研究所では20代、30代の若者に焦点を当て、時代を切り開き、地方都市の自立的かつ持続的な発展に寄与するであろう若者たちを「社会派イノベーター・クラス」と名付け、彼ら彼女らが都市に求める要素を定量調査によって抽出した。その調査結果を発表すると共に、「社会派イノベーター・クラス」と目される若者を招き、座談会を実施。当財団から発信できる「都市×知」についての興味深い要素が抽出できた。

■実施内容

- ・開催方式: オンライン配信(約90分)
- ・開催日時: 令和4年5月31日(火) 15:00～配信開始
- ・コンテンツ
 - 第1部: 若者が都市に求める要素 定量調査発表
谷口明美
(公益財団法人ハイライフ研究所 研究員)
 - 第2部: 座談会
モデレーター 紫牟田伸子 (Future Research Institute 代表)
パネリスト 井上可奈子
(食べて泊まれる寄り合い場てま里代表)
大澤悠季 (NPO 法人シブヤ大学 学長)
小口 潤 (株式会社 Connec.t 代表)
菊池勇太 (合同会社ポルト 代表)

※令和4年5月12、13日に収録済

■企画協力 Future Research Institute 紫牟田伸子 氏

(セミナーB)

第37回ハイライフセミナー 「コロナ下の生活行動と意識、変わったことと変わらないこと」

- 開催趣旨
- 本セミナーは、2021年度の研究報告「コロナ下の生活行動と意識、変わったことと変わらないこと」を発展させ、より分かりやすく伝える(広報する)ことを目的に開催。
- コロナ禍が我々の生活に与えた影響によって、生活行動や意識の変化について、外部識者協力も得ながら、興味深く解き明かしていく。
- 実施内容
- ・開催方式: オンライン配信(約120分)
 - ・開催日時: 令和4年6月下旬配信開始予定
 - ・コンテンツ(予定)
 - 第1部: <調査結果>コロナ禍の3世代に対する影響
杉本浩二(公益財団法人ハイライフ研究所
上席研究員)
 - 第2部: コロナ禍の影響と生活水準(仮)
清水 聡(慶應義塾大学商学部教授)
 - 第3部: コロナ禍と日本における環境意識(仮)
西尾チヅル(筑波大学大学院教授)
 - 第4部: <研究のまとめ>今後注目すべき4つのポイント
杉本浩二(前出)

※令和4年6月7、16日に収録予定

報告書の配布

調査報告書、研究報告書、セミナー録を完成させ次第、メールマガジン会員へ対する配信、ホームページへの掲出、及び、全国主要大学の図書館、全国公立図書館（合計 500 部）へ無償にて発送。

<令和 3 年度配信および発送実績>

- R.3/6/15 「現代若者研究」報告書 <Phase2 社会人編>
「都市生活者意識調査 2020」報告書 <データ編>
「都市生活者意識調査 2020」報告書 <分析編>

<令和 4 年度の配信および発送予定>

- R.4/6 予定 「コロナ下の生活行動と意識、変わったことと変わらないこと」研究報告書
「都市生活者意識調査 2021」報告書 <分析編>
「都市生活者意識調査 2021」報告書 <データ編>

【参考】ホームページアクセス解析（※令和3年4月1日～令和4年3月31日）

1. アクセス数と平均ページ滞在時間

年度	アクセス数	平均滞在時間
H.27 (2015)年度	133,387	1:26
H.28 (2016)年度	112,491	1:29
H.29 (2017)年度	86,577	1:46
H.30 (2018)年度	85,417	1:44
R.1 (2019)年度	96,517	1:50
R.2 (2020)年度	108,594	1:58
R.3 (2021)年度	72,721	1:54

令和3年度のアクセス数は、前年度との比較で落ち込んだ。

令和3年度は、ほぼ全期間で緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置が出されており、各月ごとに前年と比較してみると、宣言または措置が発出されていない(令和3年)10月から12月については前年からの落ち込みが小さく、視聴行動(アクセス数)と宣言または措置の発出とが相関しているようだ。

平均滞在時間は高い数値を維持しており、眺める動作から熟読する動作へと視聴態度(視聴質)が変化している傾向は変わらない。

2. アクセス数の多かったコンテンツ

順位	コンテンツ名
1位	トップページ
2位	都市の鍼治療
3位	財団情報 財団概要
4位	連載中レポート 高齢者の食品購買行動
5位	連載中レポート 暮らしの調べが聴こえる
6位	ハイライフセミナー
7位	連載中レポート 都市の鍼治療
8位	研究報告 都市生活者意識調査
9位	東京生活ジャーナル まちの価値を維持していくこと 金沢シーサイドタウン概要
10位	都市の魅力構成する要素はなにか？ トップページ
11位	連載中レポート 現代若者研究
12位	研究報告 GINZA RESEARCH 調査報告書
13位	過去研究 立澤芳男レポート

14位	21世紀のライフスタイルに関する研究 富裕層のライフスタイル研究
15位	都市の魅力を構成する要素はなにか？ メインメニューコンテンツへ移動第1回 ヤン・ゲール
16位	連載中レポート 若者研究
17位	海外都市レポート 「地区の家」の登場
18位	海外都市レポート How will we live together- 我々はいかに共存していくのか
19位	連載中レポート 海外都市レポート
20位	財団情報 情報公開

アクセス数の多いコンテンツとしては、相変わらず『都市の鍼治療』データベースがトップだが、令和2年度まで上位にいた「シェアダイニング」、「立澤芳男レポート」などをホームページ上で整理(過去コンテンツに移動)したことにより、前述のアクセス数の減少に影響があったものと思われる。

代わって、令和3年度からスタートした「海外都市レポート」の各事例がアクセス上位にあるので、記事が増えていくことによりアクセスの回復・上昇が期待できる。

3. PDF ファイルダウンロード数 (合計ダウンロード数:3,348)

■合計ダウンロード数:

H.30 (2018)年度	3,308
R.1 (2019)年度	4,426
R.2 (2020)年度	3,852
R.3 (2021)年度	3,348

① 都市生活者意識調査 2020 分析編	(176)
② 若者研究 社会人編	(166)
③ 銀座の時層 ～ハイライフ的銀座の歩き方～	(152)
④ GINZA RESEARCH 調査報告書	(142)
⑤ 都市生活者意識調査 2020 データ編	(111)
⑥ NEW ガラパゴス・マーケティング	(110)
⑦ 第一回 高齢者の食品スーパー利用動向／高齢者の食品購買行動 2021	(110)
⑧ 第二回 コロナ禍経過1年後における高齢者の購買動向／ 高齢者の食品購買行動 2021	(102)
⑨ 暮らしの調べが聴こえる第一話	(106)
⑩ 現代若者研究メルマガ版第1回	(84)

PDF ファイルダウンロード数は、3,348 回と引き続き高い状態を維持しております。

受託研究

令和3年度(2021年度)の受託研究はありませんでした。

以 上